

〔茶道筌蹄一〕床之部

利休形 二方天井まで塗廻し、妙喜庵の床是也。

板 カマチの入たるを板床といふ、利休形、

踏込 カマチなしに、座と板と一様なるをいふ、少庵好、

土 ムロ床の通りにして、疊の所も土にて塗、其上を紙にて張也、左官土齋へ元伯好み遣す也、

洞 利休形は、臺目に小間中の洞也、間口一間に間中の洞は原叟好、龕破床といふ、

壁床 利休形也、席中の壁に懸物をかくるをいふ、

〔和泉草十〕一床のは、一間、深さ二尺九寸五分より貳尺三寸迄、は、四尺四寸深さ二尺四寸、幅四

尺六寸、深さ二尺四寸六分、は、四尺、深さ三尺三寸、

〔茶窓閒話下〕紹鷗が四疊半は一間床なり、道安四尺三寸にち、めし床を休師利休見て、是は一段

よしとて、其後四疊半を建し時に、四尺三寸の床になせしより、今も多くはこれに去たがへりと

なん、

〔茶道筌蹄一〕柱類

床柱 松杉檜椎は原叟好、浪華海部屋、三疊の席にはじめてこのむ、臺目床の柱に用ゆ、

但し花入釘、凡疊入坐より上へ高サ 三尺六寸五分、板床なれば二寸七分か三寸程上ルなり、尤

柱釘は向壁よりは一、二寸高きがよし、

中柱 松の皮付、櫛大工方にては、いにしへは直木を用ゆ、近來原叟時代よりユガミ柱を用ゆ、

塗出 柱と云、杉丸太、柱 元伯好、又隠の隅にあり、いづれの席に用ゆるとも、又隠の寸法を用ゆ、又

隠は座より天井まで高サ 六尺五寸の寸法にて、一尺一寸下りて花釘を俗に柳釘也打也、其割にて

天井の高下にかまはず、床下より五尺四寸に打べし、